

小学校社会科における主体的な学びを引き出す授業づくり

社会系教育サブプログラム

齊木 大祐

【指導教員】 小林 聡、清水 亮、小貫 篤

【キーワード】 主体的な学び、対話的な学び、深い学び、問題解決学習、学習問題

1. 課題設定

私は、社会科において、主体的な学びを実現させるために、問題解決学習が有効であると考えている。またそれは、児童の社会科に対する諸課題を解決するための必要な学習の形のひとつであると考えている。現行の学習指導要領(平成31年度告示)(注1)では、社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す。

(1) 地域や我が国の国土の地理的環境、現代社会の仕組みや働き、地域や我が国の歴史や伝統と文化を通して社会生活について理解するとともに、様々な資料や調査活動を通して情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

(2) 社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする力、考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。

(3) 社会的事象について、よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚、我が国の国土と歴史に対する愛情、我が国の将来を担う国民としての自覚、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚などを養う。
とされている。

社会科において、教科書に載っている知識をそのまま教える知識注入型の学習では、児童にとって、社会科に対する目的が見えてこない。社会科を学ぶ上で、私たちが生活をしていく中での疑問や問題を教材として落とし込んでいくことで、社会科を学ぶ目的が見えてくるのではないかと考えている。そのため、社会科では問題解決学習を取り入れ、あらゆる諸課題に対して、考えを教室内で共有しながら解決に向け取り組んでいく姿勢が求められると考えている。しかし、問題解決学習を取り入れるだけではなく、授業づくりの中で児童が主体的に社会科の授業に参加できるような教師側の支援や教材研究が求められる。社会科

の本来の目的は過去を学び、そこで未来に繋がるものを考えることであり、暗記をすることではないと考えている。教師が一方的に児童に話す授業は、社会科の面白さも引き出すことができず、社会科に対して苦手意識をもってしまう児童も出てくると考えられる。その結果、児童は受け身のような状態で授業に参加し、学ぶ目的を見失う。そのような学びではなく、児童の主体性を引き出すことができるような社会科の授業の研究を行っていききたいと考えている。また、自分自身の指導力向上に繋げていきたい。

(注1) 学習指導要領(平成31年度告示) 文部科学省

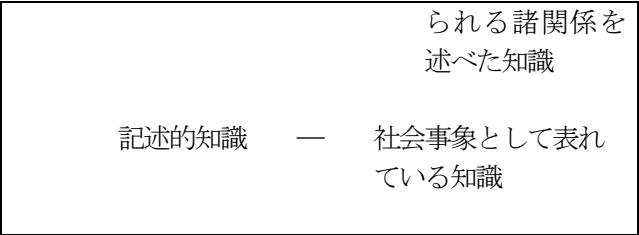
2. 社会科について

①社会科の知識構造

「学び方を学ぶ」などと方法的知識や技能などが重視された前学習指導要領への反省から、知識や論理的思考力が再び重要視されている。社会科における知識は、例えば森分孝治氏や岩田一彦氏(注2)が分類構造化している。それを整理すると図1のようになる。

図1：知識の分類と構造

価値関係的知識		規範的知識
事実関係的知識	概念的知識	— 単元で習得させたい法則性
	説明的知識	— 一般性の概念的知識と単元で扱う学習材を結びつけた知識
	分析的知識	— 原因・結果の関係ではないけれども、社会の中にみ



岩田氏は、さらに「構造化された知識が問いの過程に転換できれば、社会科授業過程の設計ができる」(注 3)と知識の構造と問いの関係の重要性を社会科授業設計との関連で述べている。そして、「問いと知識」として問いの種類と獲得される知識の関係を提示している。しかし、管見したところ、社会科の学力と関連する具体的な問いの過程までは提示されていない。

社会科の学力と学習問題として、社会科学学習目標の観点と関連させて学習問題の過程を提示しているのが小原友行氏である。小原友行氏は『「思考力・判断力・表現力」を育成するための4つの活動』として、表2の活動を提示している。(注4)

表2：「思考力・判断力・表現力」を育成するための4つの活動

① 「知る」ための活動	→資料から必要な情報を集めて読み取る。 どのように、どのような
② 「わかる」ための活動	→社会的事象の意味・意義を解釈する・事象の特色や事象間の関連を説明する なぜ、どうして
③ 「生きるための活動」	→自分の考えを論述する どうしたらよいか、どの解決策がより望ましいのか

社会科は社会認識形成を通して市民的資質を育成する教科と一般的に解されているが、①と②の活動を通して社会認識形成がなされ、③の活動を通して市民的資質が育成されると解釈できる。さらに小原氏は、思考力を育成する段階を「わかる」ための活動、判断力を育成する段階を「生きる」ための活動に位置づけている。「知る」ための活動は「わかる」ための活動の前に位置づけられている

が、学習にあたっては社会的事象の中から多くの情報を読み取り、そこに「なぜ、どうして」という学習問題が生まなければならない。このようなことから、私は、社会科の構造を分析することによって、授業者の社会科に対する教材研究も深いものにできると考える。

つまり、このように学習問題を構造化することによって深い社会認識形成が達成できるのである。以上のような小原氏の論は、社会科の学力と学習問題の構造を整理していく上で有意と判断できる。

以上を総合すると、問題解決的な学習における学習問題の構造は図3のようにまとめることができる。図には、それぞれの学習段階での設定が考えられる具体的な学習問題と、そこでの獲得が期待される知識や学力を整理体系化している。

図3：社会科授業モデル【問題解決的な学習における学習問題の構造】

【具体】 「知る」ための活動
①社会の状態・過程・経過・変化を問う「問い」
②方法・手段を問う「問い」
③程度を問う「問い」
■獲得できる知識 →記述的知識、分析的知識
■獲得できる学力 →技能、知識、関心・意欲



【抽象】 「わかる」ための活動
④社会の本質を問う「問い」
⑤思考を深める「問い」 思考の転換を促す「問い」
■獲得できる知識 →説明的知識、概念的知識
■獲得できる学力 →思考力・表現力、理解、社会認識を深める



【具体】 「生きる」ための活動

⑥ 社会への関わり方、生き方を問う「問い」

■獲得できる知識

→価値的知識、規範的知識

■獲得できる学力

→判断力・表現力、社会形成力・社会参画力、態度、市民的資質の育成

以上の図から、社会科の特徴として、社会の変化を知り、それらを見つめながら、児童自身が社会へのかかわっていくことができるのか考えることができる点が挙げられるのではないかと考える。児童がこれからの社会を生き抜いていくために必要な資質・能力を身につけるためには、問題解決型学習を通して、社会の問題に自分自身でアプローチしていくことができる力が必要になるだろう。

(注2) 岩田一彦 『社会科固有の授業理論 30 の提言—総合的学習との関係を明確にする視点』 (明治図書 2001) pp. 45-47

他に、岩田一彦 『小学校社会科の授業分析』 (明治図書 1993)、森分孝治 『社会科授業構成の理論と方法』 (明治図書 1978)

(注3) 岩田一彦 『社会科固有の授業理論 30 の提言—総合的学習との関係を明確にする視点』 (明治図書 2001) p49

(注4) 小原友行 『「思考力・判断力・表現力」をつける社会科授業デザイン—小学校編—』 (明治図書 2009) pp. 8-13

3. 小学校社会科における児童の主体的な学びについて

渡部寛人氏(注5)は、問題解決的な学習の過程において、「日本の水産業」の単元を想定した。その単元を実施した結果、子ども一人一人の考えを表出させる工夫によって、授業者にとっては子どもの考えが視覚化され、単元や授業の流れに反映させることができたと言っている。また、毎時間の振り返りから子どもの考えがどのように変化しているかを見取るとともに、支援すべき内容や支援を必要としている子どもも把握することができたと述べている。さらに渡部氏は、社会科において、単元を貫く学習問題に対する子ども

の予想を導入において取り入れることが子どもの意識を問題解決的な学習へと導き、子ども一人一人の考えを生かすための重要な起点となることが分かったと述べている。

また、渡部氏は、「単元を問題解決的な学習過程にしてい」く上で、導入にあたる学習問題の設定は重要であった」と述べている。渡部氏によると、学習問題を設定する上で、①子ども一人一人の多様な考えの広がり为保障できる学習問題②毎時間の授業を重ねるごとに、学習問題を解決していきながら子どもの学びがより高度なものへと変化していくような学習問題の2点が必要であると述べられている。単元の序盤において、すぐに答えにたどりつけるような問題ではなく、自分の考えを何度も振り返り、他者の考えも生かしながらようやく答えが導きだせるような単元を貫く学習問題を設定しなければならない。そして、そのような問題解決的な学習の中で、単元の導入で設定した学習問題に対して、子どもたちが予想という形で自分の考えを表出させておくことが重要であることが確認できた。単元の第一歩目にあたる学習問題に対する予想は単元を通しての子どもの考えの基になるだろう。子どもはその自分の考えを修正しながら、授業のねらいに迫ることになるからである。また、授業者は表出された子ども一人ひとりの予想を把握し、その変容を見取っていくことも可能である。

表1 学習問題に対する多様な考えの広がりを持った子どもたちの予想の記述

・周りが海で都市に新鮮な魚を届けられるからだと思う。(A 児)
・魚を釣っている人や売っている人がみんなに買って食べてもらうために工夫や努力をしているから。(B 児)
・日本はきれいな国だから。人々が見た目にこだわっているから。(C 児)

以上の点から、私は、子ども一人ひとりの考えを授業者が繋げることによって、児童が視覚的に問題解決に向けた考えをより深くすることができると考えた。社会科においては単元を貫く学習問題を軸にして、表出した子どもの考えを活用していくことが必要となる。渡部氏においては、毎時間の振り返りを通して、児童の考えが表出されるような工夫がなされていた。各時間が子どもの考えによって繋がりを持つ連続性のある授業構成にすることや児童自身が自分の考えを比較しながら授業に臨めるように意図を持った指導が必要であるだろう。また、比較することによって児童は自分自身の考えの変化にも視覚的に気付くことができるだろう。上記のような児童一人一人の考えを生かす工夫を取り入れることで、予想から始まった児童の考えは、最終的により授業や単元のねらいに迫るものとなった。本論文においては、予想の段階では憶測や曖昧な情報を基に記述して

いた児童も、授業を重ねるごとに自分の考えを高度なものへと改善していきながら、最終的には自分の考えを生かして具体的に、また、他者の考えを生かして多角的で説得性のある学習問題の答えを導き出すことができていたと考える。児童一人ひとりの考えを活用しながら、学習問題の解決にこだわっていくことで社会科の授業のねらいにより迫ることができる。

また、社会科の問題解決学習を行う上で、単元の出発点である学習問題の設定という点について考えていきたい。社会科の問題解決学習を行う上で、学習問題を児童に一方的に提示することは児童の興味・関心を広げることにはできない。児童の「知りたい」という気持ちが児童の学習意欲に繋がり、学びが深まると考えている。柴田好章氏(注 6)は、

「社会科問題解決学習においては、子どもが問いをもち、解決に向けて主体的に活動し、学級の仲間とともに協働することが大切です。」と述べている。柴田氏は、「子どもの素朴な疑問」を問題解決学習の出発点としている。また、柴田氏は、子どもの素朴な疑問が生まれる教材として、写真、資料。日常の振り返りを挙げており、このような教材から、生活者としての願いや、社会に対する思いなどが子どもから発信されると述べている。菊地麻紀氏(注 7)は、「子どもの問いから学習をつくり、子どもと教材・生活と学習をつなぐ社会科授業である。」と述べている。子どもが主体的に自他の問いを追究していく力を育むために、教材と子どもをどのような形で出会わせるか、問いと学習問題の設定が重要であると考えられる。また、菊池氏は、「生活と学習をつなげて事実をもとに生活経験を生かしながら学べるような場の設定をすることが大切である。」と述べている。日常生活から学習問題を設定すること、日常生活からの授業づくりは児童に学習への興味・関心が深まると考えられる。

菊地氏が日頃の授業において心がけていることとして、以下の2つを挙げている。

①子どもが問いをつくれるようになること
②社会的事象を多面的・多角的に捉えるための支援

①は、単元の最初に子どもが自分の問いから学習をつくることを目指している。社会科を学ぶ上で、重要な単元の出発点である子ども発信の問いは重要である。また、子ども発信の問いを学習問題として子どもへ返すことで、子どもが主体的に学習することができる。主体的に学習問題を解決していく上で、子ども発信からの学習は学習に対する興味・関心を深めることができる。また、授業で調べて分かったことや気づいたことをまとめ、振り返りには、自分の意見や、さらに調べたい新たな疑問などの内容的な反省と、自分や友だちの学び方の反省を書くようにすることで、継続的な問題解決学習ができるようになる。

②は、単元構造表を作成し、地理的位置や歴史的背景、工夫と努力など、その教材をどんな視点で捉えるかの見方を

示している。単元のどの時間で比較・分類・統合・関連などの方法を使って考えるのかを明らかにするといった心がけである。これらの心がけにより、子どもたちの興味・関心を広げるような写真や資料と単元の初めに合わせること、一人ひとりの様々な気づきや素朴な疑問から追究をするうえで重要となるキーワードを見つけ、単元を貫く学習問題をつくっている。また、社会的事象を多角的に捉えるために、複数の立場を重視した資料や場の設定として、単元の中のキーパーソンに焦点を当て、様々な立場の人々が協力している事実が捉えられるようにしている。以上から、児童発信の疑問から学習問題を設定することは社会科という教科を学習する上で重要であると考えられる。また、そのような疑問を教室内で共有することによって、子どもたちの考えが積み重なり、問題解決へ導き出されるのであると考えられる。柴田氏は、社会科の問題解決学習のプロセスを以下のように示している。

素朴な疑問・気づき



意見交流



学習問題

柴田氏、菊池氏の以上の考えから、社会科の問題解決学習において、児童が与えられた課題をこなすのではなく、自らが見通しをもって学べるように、一人ひとりの素朴な疑問から、教室内の児童が追究したい学習問題を構成することが社会科に求められているものであると考えられる。また、児童の素朴な疑問を生み出すための教師側の支援として、写真や資料だけではなく、児童の日常生活に視点を当てさせることが重要であると考えられる。日常生活に視点を当てさせることで児童自身は日常生活の中での疑問の解決に向けて、より興味・関心を深めながら社会科の授業に参加できる。社会科の問題解決に向けた授業づくりでは、教師側が児童の素朴な疑問や日常生活からの授業のアプローチが求

められ、その結果、児童の主体的な学びが実現できる。

社会科の学習問題において、教師が児童の視点に立ち、教材研究を行うなかで留意すべき点については、児童の素朴な疑問や日常生活の中での学習問題の設定が求められるが、伊藤公一氏(注8)は、日頃の授業づくりや授業実践において、「教材研究」をいかに子どもたちの視点から行うかという点について述べている。そのなかでも、特に「教材(学習材)選定」にこだわりをもって取り組んでいる。子どもたちの日常生活において身近でかつ、その教材を通して背景にある社会構造が見えるものを選定することが重要であると述べられている。菊池氏同様、日常生活という児童にとって身近な教材を取り扱うことによって児童の主体性を促す。そして、子どもたちの課題追究や課題解決の学びのプロセスを予想しながら、その教材を用いた授業づくりをしていくことが、子どもたちにとって興味や関心をもてる授業へとつながるポイントであると考えている。

さらに、伊藤氏は、児童の追及を深めるために、単元を三つの段階に分けた授業づくりを提案しており、具体的には、第1次～第3次に分けて述べられている。

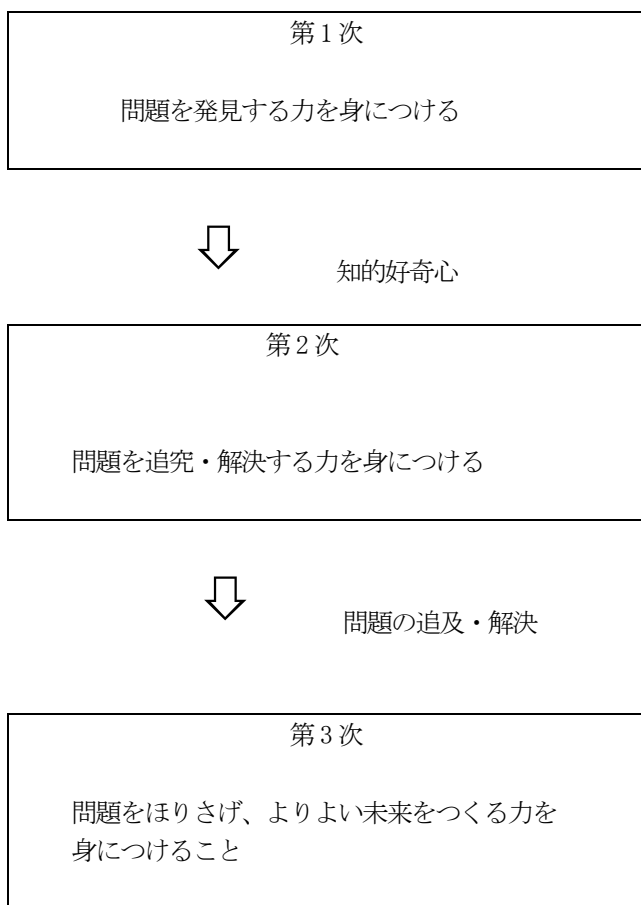
まず単元の第1次で「問題を発見する力を身につけること」を挙げている。子どもたちが初めて教材と出会った時に、「分かりたい」「知りたい」という興味・関心が深まる教材との出会いが重要である。そのために、その教材を用いた授業を構想するポイントとして、子どもたちがもっている経験や知識をゆさぶり、これまでもっていた見方・考え方をくつがえすきっかけとなる資料や発問を考えている。このことで、「分からない」気持ちから「分かりたい」が生まれ、「知りたい」「調べたい」という知的好奇心が生まれる。

この知的好奇心は第2次へ繋げるために重要であり、主体的な学びを生み出すための学習の出発点である。この問題発見能力は問題解決学習をより深い学びとするためにも重要である。

次に、単元の第2次で「問題を追究・解決する力を身につけること」を挙げている。「分かりたい」「知りたい」という思いや意欲を、「なるほど」「よく分かった」という納得へと繋げることが重要である。その際に、学習問題に対する子どもたちの予想や仮説を踏まえる必要がある。学習問題に対する予想や仮説は児童の主体的な学びにおいて重要である。予想や仮説を立てることにより、予想や仮説と違った場合には、「なぜ予想や仮説と違う結果であったのか」、予想や仮説と結果が同じであった場合には、「自分の考えが本当に結果と同じであったのか(理由づけともに)」のような振り返りを行うことができる。また、教師側が問題を追究したり解決したりすることのできる手立てを考えておくようにする。様々な資料を準備したり、見学やインタビューができるように準備をしたりするなど、子どもたちが見方・考え方を働かせながら、学習問題を追究したり解決したりできるような道筋をイメージしながら授業を構想していく。そして、子どもたち一人ひとりの学習問題に対するまとめができるようにする。問題の追及をただ単に追及として終わ

らせることは児童の主体性を引き出すことには繋がらない。問題の追及の過程で生じた疑問やさらなる問題意識を教師側が把握すること、または次も授業で教室内で共有することにより、第3次へと繋げることができる。

最後に、単元の第3次で「問題をほりさげ、よりよい未来をつくる力を身につけること」を挙げている。「さらに考えてみたい」「わたしたちにできることはないだろうか」というような、第2次までで習得した見方・考え方を活用した発展的な学習となるようにする。これらの学習は、教師側から提示したり問いかけたりする方法もある。しかし、これまでの学習を通して児童発信の疑問として出てくれば、より未来の社会に向けた児童主体の学習が実現できていると考える。



(注5) 渡部寛人 「子ども一人一人の考えを生かした社会科学学習 ～日本の水産業の授業実践を通して～」

(注6) 名古屋大学大学院教授 柴田好章 『社会科 NAVI+』 「子どもの素朴な疑問を大切にする問題解決学習」 (2023年4月)

(注7) 宇都宮大学共同教育学部附属小学校 菊地麻紀 『社会科 NAVI+』 「子どもの問いから学習をつくり、子どもと教材・生活と学習をつなぐ社会科授業をめざして」 (2023年4月)

(注8) 広島大学附属東雲小学校 伊藤公一 『社会科 NAVI+』 「子どもたちの視点からの教材研究により、社会構造を可視化できる社会科授業をめざして」 (2023年4月)

4. 児童の主体的な学びに向けて

以上の先行研究から、問題解決学習の取り組みは児童にとって社会科に対する意欲を高める効果があると考えられる。私は、本来の社会科の意義はこういったところにあるのだと考える。今日、社会における地球的課題や身の回りの社会課題は多く存在しており、それらを解決していくための資質・能力の獲得がより一層重要になってくるのではないかと考えている。私自身も児童がこれからの時代を切り開くための資質・能力の獲得は時代が進むにつれ、重要であると考えている。また、問題解決学習の取り組みをしていく上で、児童の日常生活からの視点が重要であると考えられる。児童自身が日常生活から問題を発見することによって、児童の興味・関心を深めることができる。その結果、授業を行う中で、児童の「知りたい」という気持ちが学習意欲を高めると考えられる。そして、児童の興味・関心は単元を通して、広がる。

以上の先行研究から、私は、小学校第4学年の社会科の以下の授業を構想した。

小単元名「水はどこから」

単元計画（全10時間）

① 自分たちの生活と水とのかかわりについて話し合い、自分たちが一回の手洗いで使う水の量について調べ、水が蛇口に届くまでの過程を理解する。 ・水は自分たちの生活に欠かせないものであること ・一人一回当たりの手洗いで使用する水の量
② 校内の水道設備の仕組みや働きについて調べ、ワークシートにまとめる。 ・受水槽ポンプ室や屋上タンクの場所 ・水道設備の仕組みや働きについて考えること
③ 埼玉県の一日の水の使用量についてグラフを基に話し合い、学習問題を導き出す。 ・水は生活に欠かせないものであること ・埼玉県の一日の水の使用量 ・学習問題を導き出すこと
④ 水はどのようにきれいになっているのか資料を通して調べる。 ・川の水をきれいにする仕組み ・働く人々の工夫や努力 ・埼玉県内の浄水場の位置
⑤ 大久保浄水場に関する調べを通して、きれいな水を作るための仕組みや工夫についてノートにまとめる。 ・大久保浄水場の位置 ・川の水をきれいにする仕組み
⑥ 資料を活用して、さいたま市水道局の役割や取り組み、働く人たちの工夫や努力などについて調べ、ワークシートにまとめる。 ・水の使用量の変化 ・安定供給のしくみと工夫 ・働く人々の工夫や努力 ・水質チェックの仕組み ・浄水場と配水場 ・県水の価格、県水を購入していること

み、働く人たちの工夫や努力などについて調べ、ワークシートにまとめる。

- ・水の使用量の変化
- ・安定供給のしくみと工夫
- ・働く人々の工夫や努力
- ・水質チェックの仕組み
- ・浄水場と配水場
- ・県水の価格、県水を購入していること

⑦ 「みなおそう埼玉の水」を基に、荒川上流の水源林や合角ダムへの働きについて調べ、ワークシートにまとめる。

- ・荒川と水源地のダムの位置
- ・水源林の働き
- ・ダムの働き
- ・県内外の地域の人たちの協力

⑧ 備蓄用飲料水「さいたまの水」や水道水に異物が混入された際の総帥体制を調べ、災害時にも飲料水の安定供給を図る対策をしていることをワークシートにまとめる。

- ・県水の送水体制
- ・災害時の備蓄飲料水として「さいたまの水」を販売していて、飲料水の備蓄も呼びかけていること
- ・さいたま市には応急水場が107か所あること
- ・給水車10台2万4千リットルの飲料水備蓄があること

⑨ 調べたことを基に、関係図にまとめ学習問題に対する自分なりの結論を導き出す。

- ・自分なりの結論を導き出すこと
- ・ワークシートに表現すること

⑩ 平成6年(1994年)の荒川水系及び利根川水系の渇水の様子を調べ、現代でも渇水が起こりうることを知り、水を大切に使うための取り組みを調べ自分たちにできる取り組みを考える。

- ・平成6年(1994年)の渇水の状況
- ・自分自身で取り組むこと、家族と一緒に取り組んでいきたいこと、地域の人たちと協力して進めていきたいことを考えること
- ・実践計画表にまとめること

本小単元は、小学校学習指導要領解説社会編(平成29年7月)第4学年の内容(2)ア(ア)(イ)(ウ)イ(ア)(イ)をねらいとしている。私たちが生活で使っている水は、様々な工夫や努力のおかげで飲料水として送られてきている。森林を保存したり、ダムを建設したりすることで、水源が確保、維持されている。また、浄水場で働く人々が様々な工夫をしたり、水質試験場で水質検査を行ったりすることで、水源地から各家庭に安全な水が安定供給されている。本単元では、生活で使っている水が、浄水場などの関係機関と地域の人々が互いに協力し、様々な工夫や努力をしているのおかげで送られていることについて、自主的に調べ、理解できるように

することをねらいとしている。

先行研究を行っていく上で、児童発信の素朴な疑問を日常生活から捉えさせ、問題を解決していくプロセスが重要であると考えられる。このことから、この単元では、私たちが生きる上で欠かすことが出来ない「水」の使用場面を日常生活から想起させ、問題を発見させることを目的としている。

また、この単元において特に重要なのは、導入の授業であると考えている。この単元では、日常生活において、水を「いつ」、「どこで」、「なぜ」使うのかという「使用目的」と「実際にどのくらいの量の水を私たちは使用しているのか」という「使用量」に視点を当てていくねらいがある。授業の初めに水についてどのようなことを調べるのかを教師側が一方的に示すのではなく、水について児童の興味・関心を引き出せるような支援が必要であると考えている。児童が身近の社会に触れながら学習を深めていくために、また、自分の生活ではどんな行動をしているのかという問いから導入が始まることに関しては、水を前提に授業を進めるのではなく、日常生活から水が生活において必要不可欠であるということを経験から気づけるような問いが重要であると考えている。私たちの生活において必要なものは水以外にも存在するが、水がなくなったら自分たちはどうになってしまうのかなということも想起できるようにした。また、水の使用量チェックでは、手洗いをテーマにすることで、日常生活において児童が行うことを授業内に取り入れることにより、児童の興味・関心を深めることができると考えている。児童の日常生活を基にした問いから児童が体験を通して学んでいくという過程を取り入れることで、児童の受け身状態で参加する授業を脱することができると考えている。

また、発問を中心にすることによって、水道設備の仕組みを引き出すことができる授業を考えた。第2時間目において、児童が実際に受水槽ポンプ室と高架水槽を見て感じたことを書く時間を設定することで、受水槽ポンプと高架水槽を見てさらに児童自身で調べたいことなどを教師側も把握することできると考えている。

この単元では、問題解決に向けた授業での導入が重要であると考えている。児童が日常生活で当たり前と考えていることに疑問が持てるような教師側の支援が重要であると考えている。

この単元の実践の結果、児童は日常生活で当たり前に行っている手洗いやトイレなどにおける水の使用量に目を向け、主体的に活動を行った。また、協働的に活動を行うことによる児童の主体性も促すことができた。児童の日常生活から出発し、単元が進むにつれ、水がどのように私たちに届けられるのかという仕組みを学ぶことができたと考えている。今回の実践を踏まえ、児童がより深い学びに繋がるような教材研究を行っていきたいと考えている。児童が主体的に社会科を学んだうえで、さらに児童が学びを深めるためには調べ学習だけではなく、浄水場などの見学などの実際に足を運んだうえで、理解するという教室内でとどまらせ

ない授業づくりが重要である。社会は教室内だけで完結しているわけではなく、日本だけで完結しているわけでもない。地球上の問題を解決するために、空間を広げ、児童が実際に社会に触れるという機会が学びを深める。これらの反省を踏まえ、今後さらに社会科の教材研究を行っていきたいと考えている。

5. おわりに

以上の先行研究及び私の実践を踏まえ、小学校社会科の授業において、児童発信の素朴な疑問は児童の興味・関心に繋がり、児童の主体的な学びの実現となると考えられる。また、児童発信の素朴な疑問を教師側がどのような形で生み出すことができるのかという教材研究も重要であると考えられる。小学校社会科の授業では、教師が一方的に児童の学習内容を提示するのではなく、教室内で発生した素朴な疑問を教室内で共有し、協働的に解決していくことが重要である。協働的に問題を解決することによって、社会科における問題解決は成立する。社会とは一人ひとりで生きているのではなく、自分と他者が協力し合いながら生きている。そのような複雑に絡み合った地球上の様々な問題を解決していくためには、社会科における問題解決学習含めた主体的な学びが重要であると考えている。社会科における「協働的」の中には教師と児童の協働的關係も必要になる。さらに考えなければならないことは、授業は他者との協働的な活動を通じて学びを深めていく場であるということである。一人ひとりの児童が疑問や驚きを個別に抱いていても、学級全体で追究していこうとする協働的な活動が行われにくい。したがって、児童が追究する学習課題を教室内で共有することによって、児童同士が協働的に一つの学習課題を他者とともに考えようとする意欲も高める必要がある。「学習課題の共有」が児童の問題解決に向けた意欲を高めることに繋がる。

また、教室内ですべての問題を解決していくことだけでは、社会科の問題解決の最適解とは言えない。教室内の教師と児童だけの空間だけに留まらず、学習問題の解決に向けて関わる人などを専門家として授業に参画していただくことも重要なことである。協働的に問題解決をするプロセスを経ることで、より社会に開かれた学びへと進化することができる。

私は今回の課題研究Ⅱから、問題解決学習が児童の主体性をどのように引き出すのか、また、児童が興味・関心を深め、そして広げながら学習に取り組むための問題解決学習の問題はどのようなものなのか、知見を広げることができたと感じている。今回の課題研究Ⅱを作成するにあたって、私が今まで知らなかった問題解決学習の効果や児童にとってどのような資質・能力、社会科の見方・考え方が身につくのか知見を深めることができたと考えている。

また、私は、小学校社会科の授業づくりを行うなかで、以下の観点も必要であると考えます。

1. 社会の理解を知る

社会科を学ぶことで、児童は自分がどのような社会に生きているのか、そしてその社会の中で自分がどのような役割を果たしているのかを理解することができる。歴史や地理、地域社会について学ぶことは、個々の児童が社会に対する意識を深め、より良い市民としての自覚を持つための基盤を作ることに繋がる。

2. 批判的思考と問題解決能力の育成

社会科では、過去の出来事や社会の問題を学び、その背景や原因、結果について考えることが求められます。この過程で、児童は「なぜ？」という問いを立て、複雑な問題を多角的に考える力が養われる。批判的思考を育むことは、将来にわたって多くの場面で役立つスキルとなる。

3. 地域や世界とのつながりを実感する

地域社会や世界の出来事を学ぶことで、児童は自分の生活が広い社会とどのように関わっているのかを実感できる。例えば、地域の歴史や文化を知ること、身近な場所に対する誇りや愛着が生まれる。また、地理や世界の国々について学ぶことで、グローバルな視野を持つことができ、他者とのつながりを意識できるようになる。

4. 社会的な価値観や倫理観の形成

社会科では、法や制度、人権、平等、環境問題など、社会における重要な価値観について触れることが多い。これにより、児童は社会的なルールや倫理観を学び、公正や協力、共感といった重要な価値を育むことができる。

5. 問題解決力と実生活に役立つ知識を学ぶ

社会科の学びは、ただ知識を得るだけでなく、その知識を活用して日常生活や問題解決に役立てる力を育む。例えば、税金の仕組みや選挙制度、環境問題など、現実の社会で実際に起こる問題に対する理解を深めることができる。これにより、社会に参加する力がつき、将来の選択肢も広がる。

これらの意義を踏まえた学びが、小学生にとって今後の人生における土台を作り、積極的に社会に貢献できる市民を育てることに繋がる。

私の今後の課題として、問題解決学習を基盤とし、児童が授業を通して、より主体的な学びを形成できるような授業づくりを行っていきたいと考えている。渡部氏の論文においても、考えがより高度になっていくための学習問題の設定が重要であると述べられていたが、学習問題を解決していく中で、単元を学習する前と後で児童自身が学びや考えを深めることができているかという点は考えを深めていくために重要なことである。そのために、教師側は授業ごと児童一人ひとりの学びの積み重ねを把握する必要がある。また、今後は問題解決学習だけではなく、その他の様々な学習法の在り方を研究していきたいと考えている。社会科本来の意義を私自身も常に考え、授業を行っていきたいと考えている。

6. 参考文献

- ・文部科学省 小学校学習指導要領(平成 29 年告示)
- ・「問題解決的な学習に基づく小学校社会科の授業構築—学習問題の構造に視点をあてて—」『佛教大学教育学部論集 第 22 号』 (2011 年 3 月) 小林 隆
- ・「子ども一人一人の考えを生かした社会科学習 ～日本の水産業の授業実践を通して～」 渡部寛人
- ・『社会科 NAVI+』「子どもの素朴な疑問を大切にする問題解決学習」(2023 年 4 月) 名古屋大学大学院教授 柴田 好章
- ・『社会科 NAVI+』「子どもの問いから学習をつくり、子どもと教材・生活と学習をつなぐ社会科授業をめざして」(2023 年 4 月) 宇都宮大学共同教育学部附属小学校 菊地麻紀
- ・『社会科 NAVI+』「子どもたちの視点からの教材研究により、社会構造を可視化できる社会科授業をめざして」(2023 年 4 月) 広島大学附属東雲小学校 伊藤公一